京都帝國大學法科大學

經濟論叢

第二卷　第一號

論說

●收益遞減法則ノ發見及ビ改造　法學博士　河上肇
●米價ノ騰落ト其調節ニ就テ（二、完）　法學博士　戸田海市

研究

●近代都市ノ土地買收政策　法學博士　神戸正雄
●穀倉證券論　助教授　河田嗣郎
●本邦出生率增加ノ原因（二）　講師　高田保馬
●本多利明ノ經濟說（一）　法學士　本庄榮治郎

雜錄

●經濟雜話（一）　法學博士　田島錦治
●米國ノ經濟的繁榮　法學博士　神戸正雄
●戰爭利得稅新法　法學博士　小川鄉太郎
●米歐爲替ト貿易　助教授　河田嗣郎
●諸學校學生入學年齡ニ關スル統計　醫學博士　鈴木文太郎
●最近本邦鑛業ノ發達ニ就テ　工學博士　齋藤大吉
●最近ノ金融問題（二、完）　谷村一太郎
●萊府大學ノ經濟演習　ドクトル　西彥太郎
●米國ニ於ケル外來白人ノ母語　法學博士　河上肇

本邦出生率增加ノ原因（二）

講師　高田保馬

一、本邦ニ於ケル出生率增加　二、出生率增加ノ分析　三、有配偶者數及ビ婚期ノ一可能的說明ノ一　四、動態平行律ノ可能的說明ノ二　五、出生率增加ノ原因　六、出生率ノ地方別考察　七、出生率ノ將來

一、本邦ニ於ケル出生率ノ增加

文明トハ何ゾヤ。一面ヨリ見レバコレ、出生率ノ減少ナリ。西歐ノ個人主義ハ益其極端ニ走リテ、

社會ノ將來ヲ思フ事愈乏シク、自己ノ利福ヲ計ランガ爲ニハ何等ノ手段ヲモ辭セズ。晩婚、避姙、墮胎、弘ク行ハレテ出生率減少ハ各國共通ノ病弊トナレリ。此現象ノ出現ハ概子一八八〇年頃ニアリ。國ニヨリテ多少ノ遲速ハアレ、多クハ昇騰シツツアリシ出生率ハ、此時期ヲ分水嶺トシテ、急激ナル下降ノ方向ヲトレルヲ見ル。

(人口千ニツキ出生)	一八五一—一八六〇	一八六一—一八七〇	一八七一—一八八〇	一八八一—一八九〇
普魯西	三三	三三	三六	三四
ばあでん	三三	三三	三三	三三
ゲゆるてんべる	三六	四一	四三	三六
ひゐるてんべる				三四
伊太利	—	三六	三七	三五
佛蘭西	三六	三六	三五	三四
墺太利	三七	三九	三八	三八

(人口千ニツキ出生)	一八五一—一八六〇	一八六一—一八七〇	一八七一—一八八〇	一八八一—一八九〇	一八九一—一九〇〇
和蘭	三三	三五	三六	三四	三三
丁抹	三五	三一	三二	三二	三〇
諾威	三五	三一	三一	三一	三〇
白耳義	三〇	三一	三二	三〇	二九
英蘭うええるす	三四	三五	三五	三五	三五
瑞典	三三	三一	三〇	二九	二七*

一八八〇年代以降各國ニ於ケル出生率減少ノ勢ハナホ停止スル所ヲ知ラザルガ如キ勢ニアリ。一八八〇年後各國出生率ノ最大値ト最近ニ到達シタル最小値トヲ比較セン（外國ニ關スル數字ハ皆生産率ヲ示ス）。

國名	十九世紀ノ最大値	最大値	最小値
佛蘭西	三三・〇(一八〇〇—一八一〇)	二四・九(一八八一)	一八・七(一九一一)
愛蘭		二四・五(一八八一)	二三・三(一八九〇)
墺太利	三九・七(一七七〇—七五)	三六・九(一八八三)	三一・四(一九一一)
西班牙		三七・一(一八八一)	三一・八(一九一一)
白耳義		三一・八(一八八一)	三三・七(一九〇四)
獨逸	三九・三(一八五五—八〇)	三七・三(一八八四)	二八・三(一九一三)

國名	十九世紀ノ最大値	最小値
伊太利	三九・〇(一八八四)	三一・五(一九一一)
英蘭うええるす	三五・五リ(一八七〇—七五)	三五・九(一八八一)
蘇格蘭		三三・八(一九一二)
にゆう、さうす、うええるす		三三・七(一八八一)
くゐいんすらんど		三五・三(一九一〇)
にゆうじいらんど		三六・四(一八八四)
		三五・一(一八八七)
		二四・六(一九〇三)
		三七・九(一八八一)
		二五・一(一八九九)

斯ノ如ク、出生率ノ減少ハ今文明諸國ニ於ケル一般的現象ナリ。而シテ、ソガ人口ノ自然增加ヲ

* Bertillon, La Dépopulation de la France. 1911. p. 84.

減少セシムル傾向アル限リ、コレ國運ノ發展ニ對シテ誠ニ悲觀ス可キ事實ニシテ、各國識者ノ注意漸ク其上ニ集ルモノ故ナキニ非ズ。此ノ如キ大勢ノ間ニアリテ、タダ歐露及ビばるかんノ或部分ノミハ却リテ出生率增加ノ傾向アルカ、然ラザルモ其減少ノ勢ヲ示サズ。

露西亞	四六・五(一八九一—一八九五)	四九・〇(一八九九)		一九〇一	一九〇二	一九〇三	一九〇四	一九〇五	一九〇六	一九〇七	一九〇八	一九〇九	一九一〇	一九一一
羅馬尼	三九・三(一八八一—一八八〇)	—		—	四九・一	四七・一	四八・〇	四四・四	四六・八	—	—	—	—	—
勃牙利	三六・八(一八九一—一八九九)	三九・三(一八九〇—一八九九)		三九・九	三九・五	四〇・七	四〇・一	三八・八	三九・九	四一・七	四〇・八	四一・七	三九・八	四五・〇
塞耳維	四五・五(一八八一—一八九一)	四五・一(一八九一—一八九五)		三八・〇	三八・〇	四一・〇	三九・八	三七・五	四一・三	三九・七	三七・〇	三八・八	三九・〇	三六・六 *

露西亞、羅馬尼、勃牙利ノ三國ニ於テハ、明ニ出生率增加ノ趨勢ヲ認ムル事ヲ得可シ。此ノ如キハ、既ニ文明ノ惠澤ニ浴セル範圍ニ於テ、例外ノ事ニ屬ス。而シテ、我日本帝國ガマタ此幸福ナル例外ニ屬セル一事ハ、眞ニ注目ス可キ快心ノ事實ニシテ、從ヒテ、此大勢ガ果シテナホ、將來ニ亘リテ持續ス可キ性質ヲ有スルヤ、否ヤハ、最モ吾人ノ關心ニ値ス。而モ、此問題ニ解決ヲ與ヘンガ爲ニハ、我國輓近ノ出生率增加ノ由テ來レル原因ヲ推究セザル可カラズ。吾人ハ西歐ノ國民ガ悄然首ヲ垂レテ出生率減少ノ原因ヲ考察シツツアル間ニ於テ、此增加ノ原因ヲ主題トナシ得ル事ノ幸福ヲ思ハザル能ハザルナリ。

我國人口ノ出生率ハ明治ノ初年、統計ノ微ス可キモノアリ限リニ於テハ爾來間斷ナク增加シタリ。

年次	人口千ニツキ生產	人口千ニツキ出生	年次	人口千ニツキ生產	人口千ニツキ出生	年次	人口千ニツキ出生	年次	人口千ニツキ出生
五(明治)一七・二(十ケ月間)	—	—	一四	二四・九	—	二五	三二・五	三五	三六・三

* 米田謙師　人口動態乎行論（國民經濟雜誌第十八卷第五號）
Schnapper-Arndt, Sozialstatistik. 1908. S. 248. Bertillon, op. cit. p. 67.

六	三三・六	—	—	一六	二六・八	—	三五	三二・五	五六	五五・三
七	二四・六	—	—	一七	二五・八	—	二六	三二・一	三七	三三・七
八	二五・三	—	—	八	二六・九	—	二七	三一・七	三八	三三・三
九	二六・一	—	—	一九	二七・三		八	三二・三	三九	三一・九
一〇	二五・五	—	—	二〇	—	二八・八	元	三三・〇	四〇	三六・一
一一	二四・五	—	—	二一	—	三三・六	一	三四・九	四一	三七・〇
一二	二四・四	—	—	二二	—	三二・三	二	三四・四	四二	三七・二
一三	二四・三	—	—	二三	—	三〇・六	三	三四・八	四三	三七・〇
一四	二五・六	—	—	二四	—	二八・五	四	三六・五	四四	三七・八

年々ニ於ケル亂雜ノ高下ヲ除却シ、逐次數年間ノ平均ヲトリテ檢スル時ハ、增加ノ大勢ヲ一層明ニ認ムル事ヲ得可シ。

年次	生產	死產	計	年次	生產	死產	計
五—六	二〇・七	—	—	二七—二八	三〇・二	二・八七	三二・九
七—一	二五・三	—	—	二八—二九	三二・二	三・二六	三五・五
二—一六	二五・二	—	—	三七—四一	三二・五	三・一六	三四・七
一七—二一	二七・四	一・七〇	二九・一	四一—四四	三三・九	三・一四	三七・〇
二二—二六	二八・六	二・三七	三一・〇				

此漸次的昇騰ノ間ニ、吾人ハ二回ノ驀進的增加ヲ認ムル事ヲ得。第一ハ、明治二十年ヲ中心トシテ其前後ニ現ハレ、第二ハ、明治三十年ヲ中心トシテ其前後ニ現ハレタリ。此事實ハ出生率增加ノ原因ヲ考フル上ニ於テ頗ル注目ニ値ス。

二、出生率增加ノ分析

出生率增加ノ事實ニ就キ、進ミテ其原因ヲ推究スルニ先チテ、ナホ此增加ノ事實其物ニ分析ヲ加フルヲ要ス。ソハ單ニ、田舍ニ於ケル增加ニシテ、都市ニ於ケル增加ノ意味セザルニ非ザルカ、都市ニ於テハ却リテ既ニ出生率減少ノ事實、若クバ其兆候ヲ見ルニ非ザルカ、增加ハ畢竟部分的事實ニ過ギズシテ、一般的事實タルヲ非認ス可キニハ非ザルカ。豫メ此問題ニ解答ヲ與フルニ非ズバ、原因ノ推測ニ於テ不便多キガ故ニ、今此分析ヲ遂行セント欲ス。

今、普魯西ニ就テ見ルニ其出生率ハ漸次間斷ナキ下降ヲ見ツツアリ。姙孕年齡（十五歲ヨリ四十五歲マデ）ノ女子千人ニ對スル出生數ハ、一八七六年ヨリ一九〇六年ニ亘ル各五年平均、一七四・六ヨリ順次、一六五・二五—一六三・九七—一六一・八五—一五四・八三ニ降レリ。然レドモ、此減少ハ重ニコレ、都市殊ニ伯林ノ如キ大都市ノ減少ニシテ、田舍ノ減少ニ非ズ。田舍ニ於テハタダ僅少ノ動搖ヲ見タルノミ、或地方ノ如キハ却リテ出生率ノ增加ヲ見タリ。

一八七六年ヨリ順次每五年平均

都市	一六〇・六四	一四五・一四	一四〇・六六	一三六・五九	一二九・一四
伯林	一四九・二一	一二九・五九	一〇六・二三	九六・三三	八八・六六
田舍	一八二・九三	一七九・〇〇	一八一・八四	一八三・〇六	一七六・三二
うえすとふありあ	一二九・三九	—	—	—	二〇三・一〇

（ひるしゆノ此統計ニハ多少疑問トス可キ點アレドモ姑ク其儘採錄ス）*

* Dr. Max Hirsch, Der Geburtenrückgang. Archiv f. Rassen-u. Gesellschaftsbiologie. 1911.

カカル事實ヨリシテ推測スレバ、我國ニ於ケル出生率增加モ、單ニ田舍ニ於ケル增加ニ外ナラズヤトノ疑問モ一應道理アル事ナリ。然レドモ之ヲ事實ニ就キテ觀察スルニ、此增加ノ決シテ部分的ニ局限セラレズシテ、全ク一般的ナルヲ見ル。

年次	一般出生率	五萬以上ノ都市ノ出生率			五萬以下ノ都市ノ出生率			市ノ出生率		
		生産	死産	計	生産	死産	計	生産	死産	計
二五	三二・五	二四・五			—			三五・八		
二七	三一・七	—			—			三五・五		
二九	三三・〇	二四・五			—			—		
二九	二一・九	二一・六	二・三	三三・九	—	—	—	—	—	—
四〇	三六・一	二六・二	二・四	二八・六	二八・四	二・四	三〇・九	二六・七	二・四	二九・一
四一	三七・〇	二六・五	二・六	二九・一	二八・四	二・六	三一・〇	二六・八	二・六	二九・四
四二	三七・二	二五・九	二・四	二八・三	二九・四	二・五	三一・九	二六・五	二・四	二八・九
四三	三七・〇	二六・四	二・三	二八・七	二九・九	二・四	三二・三	二七・〇	二・三	二九・五
四四	三七・〇	二六・八	二・三	二九・一	二九・六	二・四	三二・〇	二七・三	二・三	二九・六
四四マデ	出生率增加(五萬以上ノ都市)			其割合	同(五萬以下ノ都市)		其割合	同(市總計)		其割合	同(一般)	其割合
二五ヨリ	四・六			一八・八	—		—	一・八		一四・八	四・五	一三・九
二七ヨリ	—			—	—		—	四・一		一六・一	五・三	一六・七
二九ヨリ	四・六			一八・八	—		—	—		—	四・〇	一二・一
四〇ヨリ	五・二			二一・八	—		—	—		—	五・一	一六・〇
四〇ヨリ	〇・五			一・七	一・三		二・九	〇・五		一・七	〇・九	二・三
二九 生	産	二一・〇	東京	大阪	二一・〇	京都	二四・三	名古屋	一九・〇	神戸	一八・八	横濱	一三・五

同生產百ニ付死產	一〇・五六	八・九九	九・八一	一二・七〇	一四・〇五	一五・五四
同出生	三三・三	二二・九	二六・七	二一・四	三一・四	一五・五一
國	二八・五〇	二四・四八	三一・七八	三二・三四	二八・五七	二六・八九
增加	五・三	一・六	五・一	一〇・九	七・二	一・六

(二十五年及二十七年ノ五萬以上ノ都市ノ出生率ハ各都市ノ出生率ノ算術的平均ニヨル)

以上ノ數字ニヨレバ、我國都市ノ出生率ハナホ未ダ減少ノ傾向ナキノミナラズ、連年多少ノ增加ヲスラ示セリ。五萬以下ノ都市ニ於テハ、增加ノ速度、一般出生率ニ及バズト雖モ、五萬以上ノ都市殊ニ大都市ニ於テハ、明ニ之ニ超エタリ。從ヒテ、我國出生率ノ增加ハ單ニ田舍ニ於ケル增加タルニ止マラズシテ、亦都市ニ於ケル增加タリ、一般的增加タルヲ見ル可シ。

三、有配偶者數及ビ婚期——可能的說明ノ一

ココニ於テ、吾人ハ此出生率增加ノ原因ヲ考ヘント欲ス。先ヅ其可能的說明トシテ、第一ニ念頭ニ浮ビ來ルハ有配偶者ノ割合ガ增加シタルニ非ズヤ、之ニヨリテ出生率ノ增進ヲ來セルニ非ズヤト云フ事コレナリ。有配偶者ト無配偶者トノ間ニハ其姙孕率ニ於テ著シキ差異アリ。タダ生產姙孕率ノミニ就イテ見ルモ前者ハ後者ノ約八倍ニ居レリ。

	公生生產姙孕率	私生生產姙孕率
二九—三三	二一・八五	二・五〇
三四—三八	二四・二三	二・九八
三九—四三	二五・一一	三・〇〇

私生姙孕能力ヲ有スル者、卽一定年齡級ノ無配偶女子ノ增減マタ、出生率ニ影響ス可シト雖、其姙孕率ノ小ナルガ爲ニ姑ク考察ノ外ニ置ク（死產ノ姙孕率ニ於テハ私生ノ方割合ニ大ナレドモ二者ノ出生率比例ハ其爲ニ別ニ變改セラルル程ニ非ズ）。有配偶者ノ人口ニ對スル割合ノ增減ハ出生率ヲ左右スルニ重大ナル影響アル可シ。今十五歲乃至四十五歲ノ年齡階級ニ屬スル女子ヲ以テ姙孕能力者ト見做シ、其中配偶ヲ有スルモノノ全人口ニ對スル割合ノ變化ヲ見來ルニ、ソハ出生率增加ノ事實ニ對シ、何等說明ノ關鍵ヲ與フルモノニ非ズ。

年齡級	明治三十六年 有配偶者女子數	明治三十六年 人口	明治三十六年 人口ニ對スル割合	明治四十一年 有配偶者女子數	明治四十一年 人口	明治四十一年 人口ニ對スル割合
一五—二〇	一、九三、九七八	五、三六、〇四四、九六六	一八	二、三五、〇四五	五、三六、〇四四、四七四	一八
二〇—二五	九〇二、九九九			九四五、〇六六		
二五—三〇	一、三二五、四八二			一、二八九、二〇五		
三〇—三五	一、三四一、四〇三			一、二一七、四七三		
三五—四〇	一、〇六八、一五四			一、〇二六、一五四		
四〇—四五	一、〇一八、〇八〇			八五三、四五四		

明治三十六年以前ハ同種ノ計數ノ微ス可キ無シ。人口百中有配偶者ノ數ニヨリテ推測ヲ下ス外無キナリ。

年次	女子人口百中有配偶者	同	無配偶者	年次	女子人口百中有配偶者	同	無配偶者
一九	一八・九四		三〇・五三	三一	一八・二三		三一・三三
二一	一八・七四		三〇・七四	三六	一七・六一		三一・八九
二六	一八・三九		三一・一〇	四一	一七・三一		三二・一八

人口總數ニ對スル有配偶者ノ割合ハ、少シモ增進ノ勢ヲ示サザルノミナラズ、幾分下降ノ形跡ヲサヘ認ムル事ヲ得可シ。カルガ故ニ、輓近ノ出生率增加ハ全クコレ、姙孕率ノ增加ニ本ヅクモノト見ザル可カラズ。殊ニ此姙孕能力ニ關シテハ、婚期ノ方面ヨリ不利ナル影響ノ生ジ來レリト認ム可キ理由アリ。出生率增加ノ原因ハ全然婚姻關係以外ノ變動ニ之ヲ覓メザル可カラザルナリ。晩婚ハ二ノ方向ニ於テ出生率ノ減耗ヲ來ス。一ハ公生姙孕能力期間ノ短縮ナリ、他ハ姙孕率ノ減少ナリ。後者ノ原因トシテハ獨身期間ノ延長ニヨル不規則ナル性交、花柳病ノ蔓延等ヲ擧グルモノアルモ*、ソハ恐ラク副次的ノモノニシテ、重ナルモノハ純生理的ノ事情ニ存セン**。婚期ト姙孕率トノ關係ハ極メテ密接ニシテ規則的ノモノナリト考ヘラル。J. Betillon ノ擧グル計數ニヨレバ、伯林ニ於テ、女子ノ結婚後十年又ハ十五年ヲ經タルモノ百ニツキ無子者二十歲ヨリ二十五歲迄ノ間ニ結婚シタルモノニアリテハ、僅ニ八・六、三十歲ヨリ三十五歲迄ノ間ニ結婚シタルモノニアリテハ實ニ二五・八ヲ算シタリト云フ。而シテ、同一ノ法則ハ他ノ年齡階級ニ就イテモ同樣ニ行ハルルナラン。われすとらりあニ於ケル事實モ亦此法則ヲ證明スルモノナリト云フ。然ルニ、我國近年ノ傾向ニ見ルニ、男女共ニ漸次晩婚ニ赴クガ如シ。男子ノ晩婚ハ其自體トシテハ出生率ノ上ニ影響スル所少カル可シト雖モ、延イテ女子ノ晩婚ヲ招來スルガ故ニマタ注目ニ値ス。

明治三十二年ヨリ明治四十三年ニ至ル十二年間ノ男子及ビ女子ノ平均婚姻年齡ヲ示ス時ハ次ノ如シ†。

* Max Hirsch, a. a. O. S. 634.

** Bertillon, op. cit. p. 95.

† 高野博士統計學研究 二〇〇頁二〇一頁

年次	夫ノ平均婚姻年齢	妻ノ平均婚姻年齢	年次	夫ノ平均婚姻年齢	妻ノ平均婚姻年齢	年次	夫ノ平均婚姻年齢	妻ノ平均婚姻年齢
二二	二七・五九	二五・〇〇	二六	二七・九一	二五・三二	四〇	二九・三三	二三・七五
二三	二七・六六	二五・〇六	二七	二七・八六	二五・四〇	四一	二八・五二	二三・八八
二四	二七・八一	二五・二一	二八	二八・六四	二四・〇三	四二	二八・六〇	二三・九五
二五	二七・七六	二五・二二	二九	二八・七六	二五・九六	四三	二八・六八	二四・〇三

漸次ニ婚姻年齢ノ増加セルヲ見ル可シ。殊ニ初婚ノ平均年齢ハ之ヨリモ更ニ増加ノ程度大ナリト認ム可キ理由アリ。蓋シ上ノ平均年齢ハ初婚以上ノモノヲ含ムモノナルガ、再婚以上ノ人ハ漸次減少シ（離婚數ノ減少ニヨリ）而シテ此再婚以上ノ人ニ於テ、婚姻年齢ノ著シク高キヲ見レバナリ。次表ハマタ、晩婚ノ事實ヲ明ナラシムルモノアリ*。

最多婚姻年齢級ノ比例數

年次	男	女	年次	男	女	年次	男	女
	二〇—二五	二〇—二五		二〇—二五	二〇—二五		二五—二〇	二〇—二五
二二	二七・二八	二五・四一	二六	二七・四二	二五・六五	四〇	二八・一四	一四・一四
二三	二六・八九	二九・二五	二七	二八・〇一	二五・〇六	四一	二七・七六	一四・七四
二四	二六・二一	二〇・四〇	二八	二二・四一	二二・〇五	四二	二二・九〇	一五・二〇
二五	二五・九五	二一・四六	二九	二一・〇五	二二・〇五	四三	二一・八二	一五・九五
二六	二四・八六	二一・六七	三〇	二一・二一	二〇・七四	四四	二一・〇四	一六・五一
二七	二四・六四	二二・六七	三一	二一・八〇	二九・五二	四五	二一・八〇	一七・四二
二八	二九・九二	二二・六一	三二	二〇・二〇	二七・〇七	四六	二〇・八二	一八・七三
二九	二九・一一	二二・五六	三三	一五・一七	二七・〇〇	四七	二一・〇八	一八・〇二
四〇	二一・二六	二四・九四	三四	一四・五二	二七・八九	四八	二一・二七	一七・六一

* 二階堂保則氏　統計集誌本年九月號所載論文

四一	三四・五四	三四・九三	一四・七六	三七・四一	一七・七五
四二	三四・三三	三四・一〇	一四・九七	三七・〇一	一七・六七
四三	三四・七八	三四・〇六	一五・〇八	三六・四〇	一七・四〇
四四	三一・三三	三四・〇八	一五・三六	三七・四五	四一・六六	一六・五六

此明ナル晩婚ノ事實ハ當然、出産率ヲ幾分ナリトモ減少セシムル効力ヲ有シタルニ相違ナシ。婚姻關係ノ方面ノ考察ハ出生率增加ノ説明材料ヲ供給セズシテ、寧ロ其減少ヲ豫想セシムルモノアルナリ。

四、動態平行律——可能的説明ノ二

吾人ハ此出生率增加ノ原因ヲ死亡率ノ變動ニ覓ムル可キニ非ザルカ。死亡率ハ實ニ出生率ヲ制約スル一ノ重要ナル條件ニシテ、前者ノ變動ハ後者ノ變動ヲ伴フコト多シ。此事實ヲ力説シタルモノハ所謂人口動態平行律又ハ死生平行律 (la loi du parallélisme des mouvements de population ou la loi du parallélisme de la mortalité et de la natalité) ナリ。吾人ハ豫メ此經驗律ノ妥當性如何ヲ檢セント欲ス。

動態平行律ハ必ズシモ J. Bertillon ノ創見ニ出ヅト云フ可カラズ、*然レドモ氏ノ如ク之ヲ力説シ詳論シ重視シタルモノ無シ。今其內容ヲ述ブルニ氏ノ言ヲ假ラン。死亡率强ケレバ出生率亦强シ、死亡率弱ケレバ出生率亦弱シ、死亡率昇レバ出生率亦降リ、死亡率降レバ出生率亦降ル**。其論證ハ二部分ヨリ成ル。一ハ演繹的心理的ノモノニシテ、他ハ統計的ノモノナリ。法則ノ形成

* Bertillon, op. cit. p. 66 et suiv. Quételet, Physique sociale, 1853. Tome 1er Liv II. Guillard Démographie comparée, 1855. chap. IV.
Bertillon père, Art. Natalité, du Dic. enc. des Sc. méd. 米田講師前揭論文參照
** op. cit. p. 86.

バ後者ニヨリ、其説明ハ前者ニ基ケリ。其説明ヲ見ルニ大要次ノ如シ。死亡ハ死者ノ年齢如何ヲ問ハズ、自ラ出生ヲ促ス傾向ヲ有ス。若シ彼ヲシテ子供ナラシメバ、其両親ハ其慈愛ヲ注ガント欲シテ他ノ子供ノ生ルルヲ求メン。吾人ハ佛蘭西ニ於テ、特ニ此事實ノ多數ナル實例ヲ見ル。死者ニシテ成年ナランカ、彼ノ死亡ハ一ノ空職ヲ生ズルガ故ニ、之ニ代リ就ク者ノ新世帯ヲ作リ子ヲ産ム事ヲ得シム。最後ニ死者ヲシテ老人ナラシメンカ、亦同一ノ結果ヲ生ズ。何トナレバ、彼若シ貧者ナラバ其死亡ハ其子ノ負擔ヲ減ジテ結婚スルヲ得セシメ、富者ナラバ其遺産ノ相續ハ亦子ヲシテ世帯ヲ持ツ事ヲ容易ナラシム。カクテ吾人ハ出生ト死亡トノ間ニ存スル關係ヲ理解スル事ヲ得ルナリ*。次ニ其統計的研究ニ一瞥ヲ投ゼン。此研究ハ二ノ部分ヨリ成ル。一ハ異ナレル地方ノ比較ニシテ、他ハ同一地方ニ於ケル連續時期ノ比較ナリ。異ナレル諸地方ヲ比較シテハ曰ク、千八百九十一年ヨリ同九十九年ニ至ル歐洲諸國ノ死亡率出生率ニ就イテ見ルニ、死亡率大ナル國ハ出生率亦大ナリ、死亡率小ナル國ハ出生率亦小ナリ。死亡率二〇・〇以下ノ十國ニ於テハ出生率ハ概ネ三二・〇ヲ超エズ、僅ニ二ノ例外ヲ存スルノミ、死亡率二〇・〇以上ノ十三國ニ於テハ出生率ハ皆三〇・〇ヲ超エ、三國ヲ除ク外三五・〇以上ニ達セリ。死亡率ノ最大、最小ナルばーでん芬蘭(ヲ)ハ出生率マタソレゾレ最大最小ナリ。連續時期ノ比較ヲ説イテハ曰ク、十九世紀後半、歐洲各國ノ毎十年間平均ノ出生率死亡率ヲ見ルニ此二者ノ變動ハ常ニ殆ンド相平行セリ。特ニ瑞典、白耳義、英蘭うえるす、蘇格蘭ニ於テ然リ。

先ヅ其心理的説明ヨリシテ考ヘン。所謂動態平行律ハ之ヲ二ノ部分ニ分析スル事ヲ得可シ。一ハ

* op. cit. p. 84.

卽チ靜的平行律ニシテ他ハ卽チ動的平行律ナリ。死亡率大ナル地方ハ出生率亦大ニ、死亡率小ナル地方ハ出生率亦小ナリト云フハコレ靜的平行律ナリ、死亡率昇レバ出生率亦昇リ、死亡率降レバ出生率亦降ルト云フハ動的平行律ナリ。けどれえ、ぎゆいやあるノ確立セント試ミタルハ靜的平行律ニ非ザルカ、ふある*ノ論證亦靜的平行律ニ屬ス、タダふあるニ至リテハ、此靜的平行律ヲ動的ニ變形シ以テ其實際ニ於ケル適用ヲ試ミタリ。而シテべるちよんノ心理的說明ハ此二者ニ共通ナルモノナルガ、之ヲ幼兒死亡率ニヨル說明ニ比スレバ遙ニ勝レリトス。出生率ノ增加ハ幼兒死亡率ノ增加ヲ來スコトニヨリテ一般死亡率ヲ增加セシム、コレ出生率ト死亡率トノ平行スル所以ナリト云フ所說ハ、**平行ノ因果ヲ反轉セシメタル點ニ於テ、べるちよんノ說明ト正ニ相反對ス。吾人固ヨリ、幼兒死亡ニヨル死亡率增加ノ事實ヲ認メザルニ非ズ。然レドモ、其影響ハ割合ニ微弱ニシテ、千八百六七十年代ノばばりあノ如キ特別ナル社會ニ於ケルヲ除ク外、生死ノ平行ヲ齎ス力ナシ。明治三十二年ヨリ明治三十八年ニ至ル現在人死亡年齡別ニ就キテ見ルニ、滿五歲以下ノ死亡ハ死亡千中三百五十四、卽其三分ノ一强ニ過ギズ。今出生率ガ一割ダケ增加シ、此增加ガ五年間持續スル場合ニ於テ、幼兒死亡ノ增加ニヨル死亡率ノ增加ハ幾何ナル可キカ。極メテ粗雜ナル概算ヲ求ムレバ、ソハ出生率ノ三十分ノ一ニ過ギズ、卽チ出生率ニ於ケル增加一割ノ三分ノ一ニ過ギズ。出生率ガ一割ダケ增加シタル其年、又ハ其翌年ニ於ケル死亡率ノ增加ハ、遙ニ其以內ニアル可シ。マタ、五歲以上ノ死亡率ハ甚ダ小ニシテ、五歲乃至十歲マデノ死亡數ハ、死亡總數千中二九・一ニ居ルニ過ギズ。故ニ出生率增加ヲシテ五年以上持續セシムルモ死亡率ノ

** Bertillon, op. cit. p. 72. Onslow, French Commission on Depopulation. Eugenics Review, July. 1913. p. 137.

* Vital Statistics : Selections from the Reports & Writings of W. Farr 1885.

増加ハ三分ノ一割ヲ超ユル事幾クモナシ。出生率ニ於ケル一定數ノ増減ガ、死亡率ニ於ケル同數ノ増減ト相伴フト云フ意味ノ平行關係ニ至リテハ、到底之ヲ以テ説明セラル可キニ非ザルナリ。此點ヨリ見レバ、べるちよんノ説明ハナホ遙ニ勝レルモノアルヲ見ル。然レドモ、此説明亦勿論缺點ヲ包藏ス。第一、動的平行律ノ説明トシテ之ヲ見ンカ。若シ社會ノ人口ガ自然増加ヲ見ル事無ク、常ニ全然停止的ノモノナラバ、此説明ハ生死ノ平行ノ説明トシテ完全ナル可能アリ。然レドモ、社會ノ人口ハ大抵常ニ出生超過ニヨリテ増加ス。然ラバ死亡ニヨリ生ジタル増加ノ餘地ガ、出生率ノ増加ヲ伴フコトナキ此出生超加ニヨリテ補塡セラレザル事ヲ、如何ニシテ斷言シ得ルカ。氏ノ説明ハ死亡率ノ増加ガ出生率ヲ増加セシムル傾向アル事ヲ説クニハ充分ナル可シ、然レドモ二者ノ變動ノ數量的平行ヲ説明スルモノトシテハ何等ノ價値ナシ。第二、靜的平行律ノ説明トシテ之ヲ見ンカ。此場合ニモ、若シ自然増加ト云フモノノ存在セザルモノナラバ、ソハ充分ナル説明ナル可キ可能アリ。然レドモ、出生率ハ殆ド常ニ死亡率ニ超過ス。而シテ此超過ハ其社會ノ種々ナル事情ニヨリテ規定セラレ、各、社會ニヨリテ其大サヲ異ニス可キモノナリ。從ヒテ出生率全體ノ大サハ、一方死亡率ニヨリテ決定セラル可シト雖モ、他方マタ、其社會特有ノ事情ニヨリテ決定セラル。今二社會アリテ、一ハ他ヨリモ死亡率高シトセバ、出生率モ亦高カル傾向アル可シ。而モ、此傾向ガ他ノ事情ニヨリテ抑壓セラルルノミナラズ、他ノ事情ノ力更ニ強クシテ、其出生率ヲ他ノ社會ニ於ケルヨリモ、更ニ低カラシムル事ナキニ非ズ。而シテ、死亡率ハ出生率ヲ決定スル唯一條件ニモ、マタ最モ強キ條件ニモ非ズ。所謂他ノ事情ノ決定力大ナルモノアレ

バ、各社會ニ於ケル死亡率ト出生率トノ大小ガ相平行セザル可カラザル理由ハ存在セザルナリ。以上ハ一ノ死亡ハ一ノ出生ヲ惹起スルモノナリト云フ假定ニ立チテノ論ナルガ、此ノ假定ハ事實ニ非ズ。一々ノ死亡ハタダ、一々ノ出生ノ可能又ハ餘地ヲ作ルノミ。事實一々ノ出生ノ實現セラレンガ爲ニハ、他ノ動力ノ助力ヲ要ス可シ。一々ノ死亡ハタダ一々ノ出生ヲ惹起スル傾向アルニ止マリ、カカル餘地又ハ可能ノ爲ニ惹起セラルル出生ハ死亡ノ數ニ相若カザル事アル可シ。此點ニ於テ氏ノ論法ハ亦其價値ニ失フ所アル可キナリ。要スルニ氏ノ心理的說明ハ生死ノ平行的傾向ヲ說クモノトシテハ充分ナリ、然レドモ數量的性質ヲ有スル動態平行律ノ說明トシテハ殆ンド其價値無シ。否、後ニ說クガ如ク、カカル平行律ト云フモノガ嚴密ナル意義ニ於テ存在シ得ザルモノナリトセバ、其價値ナキハ當然ノ事理ノミ。

轉ジテ、其統計的研究ヲ概觀スルニ、生死ノ平行ハタダ極メテ大體ノ傾向トシテ存在スルニ止マリ、決シテ之ヲ以テ一ノ經驗律トシテ許ス可キニ非ザルガ如シ。『社會ハ之ヲ常ニ水ヲ滿セル濠ニ譬フ可シ、水ノ流入スル管アレドモ他ノ管ヨリ流出スルニ非ズンバ、又流出スル程度以上ニハ入リ來ル事能ハズ』* ト云フガ如キハ餘リニ過ギタリ。先ヅ、各國ノ死亡率出生率ノ比較ニ見ルニ、之ヨリシテ認メ得ラルル事ハタダ、死亡率ノ極メテ大ナル國ハ其出生率亦大體上、死亡率ノ極メテ小ナル國ヨリモ大ナリト云フニ止マル。任意ノ數國ヲ取リ來リテ、死亡率ノ大ナルモノハ其小ナルモノヨリモ出生率大ナリト云フガ如キ關係ハ毫モ存在セズ。

出生率ノ順序ト死亡率ノ順序トハ頗ル相異ナリ。

* Bertillon, op. cit, p. 86.

死亡率ノ順序		死亡率	出生率	出生率ノ順序
1	瑞典	一六・三	二七・二	2
2	諾威	一六・三	三〇・五	7
3	丁抹	一七・五	三〇・三	6
4	愛蘭	一八・一	三三・八	1
5	英蘭うはるす	一八・二	三〇・一	5
6	和蘭	一八・四	三三・五	10
7	蘇格蘭	一八・六	三〇・六	8
8	白耳義	一九・四	二八・八	4
9	瑞西	一九・四	二六・七	3
10	芬蘭	一九・五	三三・三	9

（上段死亡率ノ小ナル國下段死亡率ノ大ナル國）

（一八九一—一八九九—毎年平均）

死亡率ノ順序		死亡率	出生率	出生率ノ順序
11	普魯西	二一・九	三七・〇	17
21	ばあでん	三三・〇	三五・一	11
13	獨逸	三三・三	三六・一	15
14	うゆるてんべるひ	三三・三	三四・三	12
15	索逸	三四・〇	三九・三	20
16	伊太利	三四・一	三四・六	13
17	ばばりや	三五・三	三六・四	16
18	塞爾維	三五・九	四三・五	21
19	勃牙利	三六・二	三九・三	19
20	墺太利	三七・〇	三七・六	18
21	西班牙	三九・八	三五・一	14
22	匈牙利	三九・九	四〇・六	22
23	露西亞	三六・四	四〇・五	23

更ニ死亡率ノ順序ニ從ヒテ甲(1 2 3)乙(4 5 6 7)丙(8 9 10)丁(11 12 13 14)戊(15 16 17 18)己(19 20 21 22)ノ五群ヲ作リソレゾレノ死亡率出生率ノ平均ヲ求メンカ。

（注意）實際ノ人口數ニ應ジテ weight シタル平均ヲ求ムル能ハザレバ單ナル算術的平均ニヨル此平均ニ意義少シト云フモノアラン、而モ今ノ場合他ノ平均ヲ求ムルノ煩ニ勝エザルナリ。

	死亡率	出生率		死亡率	出生率
甲	一六・七	二九・三	丁	三三・三	三五・一
乙	一八・三	二九・〇	戊	三四・八	四〇・〇
丙	一九・五	二九・九	己	三六・二	三八・一

マタ死亡率ノ小ナル諸國、其大ナル諸國ヲ、ソレゾレノ出生率ガ其國ノ死亡率ノ割合ニシテハ、大ナルモノ、小ナルモノノ二群ニ分チ、出生率死亡率ノ平均ヲ覓メテ對比セシムレバ次ノ如シ。

	死亡率	出生率		死亡率	出生率
A（1 4 5 8 9）	一八・二	三七・五	C（12 14 16 17 21）	二四・九	三四・五
B（2 3 6 7 10）	一八・一	三一・二	D（11 13 15 18 19 20）	二四・五	三九・一

コレラノ表ニヨレバ、明ニ、死亡率ノ小ニシテ出生率ノ却リテ大ニ、死亡率ノ大ニシテ出生率ノ却リテ小ナル場合少カラザルヲ看取ス可シ。

死亡率出生率ノ同一社會ニ於ケル連續的變動ヲ見ルニ、コレ亦數量的平行ヲ示スモノニ非ズ。一八五〇年代ヨリ出生率增加ノ極ニ達セル一八七〇年代ニ至ル生死ノ增加ヲ見ルニ、此二者ノ步調ハ甚シク相異ナリ。

一八五〇年代ノ平均ト一八七〇年代ノ平均トノ差

	普魯西	ばあでんぶるくぐらふてんべるひ	和蘭	白耳義	蘇格蘭	墺太利	ばばりあ	索邏	英蘭
出生率	+2	+5	+7	+3	+2	+1	+2	+7	+4	+1
死亡率	0	+1	+1	−1	−1	+1	+1	+4	+2	−1
差異	+2	+4	+6	+4	+3	0	+1	+3	+2	+2

完全ナル平行ノ認メラルルハ僅ニ蘇格蘭一國ニ過ギズ。而シテ出生率ノ變動ノ死亡率ノソレニ遙ニ超エタルハ死亡率ガ出生率ノ上ニ規制的作用ヲ及ボス事ノ極メテ微弱ナリシヲ見ル可キナリ。

個ヨリ、死亡率ト出生率トノ間ニ多少ノ平行的傾向ノ存在スル事ハ否定ス可キニ非ズ。而モソハ

飽迄一ノ傾向タルニ止マル事實ニ於テ出生率ノ大サヲ決定スルニハ數多ノ他ノ傾向ノ之ト協働スル事ヲ忘ル可カラザルナリ。而シテ吾人ノ見ル所ヲ以テスレバ、出生率ノ變化ヲ制約スル傾向ノ中、今日ノ社會ニ於テ特ニ强キ勢力ヲ有スルモノ三アリ。一ハ、死生平行ノ傾向ニシテ、ソハ死亡ガ出生ヲ決定スル事ニヨリテ二者ノ間ニ相關ヲ保タシム。二ハ、社會全體ノ經濟的事情ニシテ二者ノ上ニ同時ニ影響スル事ニヨリ其間ニ聯絡ヲ存セシム。三ハ、過度ナル個人主義ニシテ、死亡率ノ上ニ殆ンド直接ニ影響スル事ナク、タダ出生率ヲ減耗セシムル作用ヲノミ有ス。事實ニ於ケル出生率ハ常ニ、少クモ此三者ノ勢力ニヨリ、不斷ノ變改ヲ蒙ルモノナレバ、ソガタダ死亡率トノミ步調ヲ一ニスト云フガ如キ事ハ到底アリ得可カラザル事ナリ。

經濟的事情ハ長短二種ノ變動ヲ出生率ノ上ニ及ボス。其短期ノ變動ノ原因ハ年々ノ景氣ノ良否ニシテ長期ノ變動ノ原因ハ生產力ノ一般的增進ナリ。而シテ其與フル變動ノ方向ハ正ニ平行律——若クバ死亡ノ出生ニ對スル決定ノ作用方向ト相反對セリ。短期ノ變動ハ景氣ノ如何ニヨリ或ハ出生率ノ減少死亡率ノ增加トナリ、或ハ出生率ノ增加死亡率ノ減少トナル。二者ハ逆比ノ關係ニ於テ變動スルナリ。長期ノ變動ニ於テ最モ著シク現ハルルモノハ、出生率ノ增加ニシテ、死亡率減少ノ傾向亦、之ニ伴フモノアル可シ。勿論長短何レノ變動ニ於テモ。出生率ノ增加ニ伴ヒ、幼兒死亡率ノ增加ヲ來ス可シト雖モ、ソハ間接ノ變動、而シテ其程度モ亦、前述ノ如ク大ナラズ。短期ノ變動ニ就イテ見ルニ、ソノ攪亂的作用ハ常ニ生死ノ平行ヲ實現セシメズシテ、其逆行ヲ實現セシメツツアリ。「出生ノ多キ年ハ死亡ノ低キ年ト一致シ、又低キ出生率ハ高キ死亡率ト一致シ、

或ハ低キ出生率ノ高キ死亡率ニ繼グ事ハ(生死ノ平行ヨリモ)一層普通ナリ。是レ其年ノ經濟的繁榮ハ出生率ヲ増加セシムルト共ニ死亡率ヲ減少セシムル事ヲ指示スルモノナリ」。* 明治六年以降我國ノ出生死亡ニ就テ見ルモ亦此事實ヲ認メ得可シ。

年次	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三
生産率	三三・六	二四・六	三三・三	三六・一	三五・五	二四・四	二四・四	二五・六
死亡率	九・三	二〇・五	一九・一	一七・七	一七・八	一六・九	二〇・一	一六・六
年次	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三
生産率	三六・八	三三・八	三六・九	三七・三	三七・一	—	—	—
出生率	—	—	—	三六・八	三八・六	三一・六	三二・三	三〇・六
死亡率	一八・一	一八・六	三三・一	二四・四	九・三	一九・〇	二〇・二	二〇・四
年次	二四	二五	二六	二七	二八	二九	三〇	三一
出生率	三一・一	三一・七	三三・二	三三・〇	三三・九	三四・三	三四・四	三四・八
死亡率	二二・七	二〇・一	二〇・二	二一・四	二〇・三	二〇・四	二一・一	二〇・三
年次	三二	三三	三四	三五	三六	三七	三八	三九
出生率	三三・三	三三・七	三三・三	三一・九	三六・一	三七・〇	三七・二	三七・〇
死亡率	二〇・〇	二一・二	二一・九	二〇・〇	二〇・〇	二〇・九	二一・九	二〇・三

年々ノ生死ノ變動ノ方向相一致スルカ、又ハ年々ノ死亡ノ變動ガ翌年ノ出生ノ變動ト其方向ヲ一ニスルハ、コレ生死ノ相平行スルヲ意味シ、然ラザルハ其逆行ヲ意味ス可シ。

	出生ノ増減ト其年ノ死亡ノ増減ト相伴フ年數	二者ノ相反對スル年數	出生ノ増減ト其前年ノ死亡ノ増減ト相伴フ年數	二者ノ相反對スル年數
十八年以前	七	六	六	六
十九年以後	八	一五	七	一六
計	一五	二一	一三	二二

* Mayo-Smith, Statistics and Sociology, p. 140.

全體ヲ通ジテ、二者ノ變動ノ相逆行スルモノ約五分ノ三ニ居リ、相平行スルモノハ約五分ノ二ニ過ギズ。十九年以後ノミヲ取リテ考フレバ、逆行スルモノ三分ノ二、平行スルモノ僅ニ三分ノ一ノミ。生死平行ノ關係ハ經濟的事情ノ變動ノタメニ全ク攪亂セラレ了レリ。

然レドモ、此短期ノ變動ハ、稍長キ時期ヲ取リテ通觀シ平均スル時、幾分カ相殺セラレテ、タダ長期ノ變動ノミヲ認メ得可シ。而シテ輓近來長期ニ亘レル經濟的事情ノ變化ト見ル可キハ、コレ、生產力ノ增加ナルカ、其躍進的增加アル場合ニ於テハ出生率ガ死亡率ノ增減ニ拘ハラズ著シク增加スルヲ見ル。一八五〇年代ヨリ一八七〇年代ニ亘ル歐洲諸國ノ出生率ノ增加ハ皆之ニ原ヅクモノニシテ、死亡率ノ殆ド停滯又ハ減少セルスラアルニ、出生率ノ急增スルハ、正ニ長期ニ亘リテ平行律ノ作用ヲ阻害シタルモノナリ。而シテ此生產力ノ一般的增進モ亦、死亡率ノ上ニ多少良好ナル影響ヲ及ボス可シト信ゼラレザルニ非ズ、蓋シ充分ナル營養ハ幾分死亡率ヲ減少セシムル傾向アル可ケレバナリ。然レドモ、其程度ハ決シテ著シキモノニ非ズ、從ヒテ數量的ニ之ヲ窺知スル事ヲ許サレザルモノナリ。

經濟的事情ノ變遷ガ出生率ノ上ニ影響ヲ及ボス際ニハ、同時ニマタ、死亡率ノ上ニモ影響ヲ及ボスガ故ニ、ヨシ生死ヲシテ逆行セシムル傾ハアレ、二者ノ間ニ何等カノ直接ナル相關關係ヲ保持セシム。然ルニ過度ナル個人主義ノ影響ニ至リテハ、主トシテタダ出生率ノ上ニノミ存シテ、殆ド死亡率ノ上ニ及バズ。例ヘバ醫療ノ改善ガ主ニ死亡率ノ上ニ作用シテ、出生率ノ上ニ作用セザ

ルガ如シ。從ヒテソハマタ、常ニ生死ノ平行關係ヲ攪亂スル一動力タリ。例ヘバ佛國ニ見ルガ如キ、死亡率ノ減少ヨリモ速ナル出生率ノ減少ノ如キハ、正ニ此ノ如キ原因ニ本ヅクモノナリト見ザル可カラズ。而シテ、出產制限ノ益有意的ニ行ハレントスル文明諸國ノ風潮ハ今ヤ此攪亂的作用ノ愈强カル可キヲ思ハシム。

要スルニ數量的ナル生死平行律ハ之ヲ認ムルヲ得ズ。タダ、生死ノ間ニ一定ノ平行關係ノ存在スル傾向アル事ハ、之ヲ肯定セザル可カラザルナリ。而モソハタダ一ノ傾向タルニ止マルガ故ニ、平行關係ノ實現如何ハ、繫リテ他ノ協働傾向ノ作用如何ニアリ。而シテ吾人ノ見ル所ヲ以テスレバ、死生平行ノ傾向(死亡ガ出生ヲ促進スル過程ニ於ケル)ハ靜學的傾向トモ名ク可キモノニシテ(經濟的事情ニ本ヅク短期ノ變動ニ就キテハ姑ク說カズ)、他ノ有力ナル二傾向ハ動學的傾向トモ名ク可キモノナリ。一ハ、社會事情ノ變動如何ニ關ハラズ、常ニ作用スル所ノ傾向ナルガ故ニ、之ヲ靜學的ト云ヒ、二ニハ、社會事情ニ於ケル何等カノ變改ヲ俟チテ、始メテ作用スル所ノ傾向ナルガ故ニ、之ヲ動學的ト云フ。個人主義ノ新ナル發達ナク、マタ、生產力ノ久シク停止的狀態ニアルカ、然ラズトスルモ、生產力ノ增進ガ其步調ヲ常ニ人口ノ自然增加ト一ニスル場合ニ於イテハ、此等動學的傾向ハ作用シ來ル事ナシ。カクテ、靜學的ナル平行的傾向ノミ作用シテ、事實上ノ生死ガ、長期間ヲトリテ考察スル時必ズヤ、平行關係ヲ存スルヲ認メ得可シ。タダ年々ノ變動ニ至リテハ、短期ノ經濟的變化ノ爲ニ作用セラルガ故ニ、二者モ逆行ノ事實ヲ示ス事稀ナラザル可キナリ。但シ、此場合平行ノ事實ヲ見ル可シト云フモ、其平行ハ死亡率ニ一ノ增加アリ二ノ減少アレバ、出生率ニマタ一

ノ増加アリ二ノ減少アル可シトノ謂ニ非ズ。一方ノ増減ハ他方ノ之ニ比例セル増減ヲ齎ス可シトノ事ヲ意味スルニ外ナラザルナリ。

カクテ、吾人ハ死亡率ガ出生率ヲ決定スル有力ノ一要素ナルヲ認ム。然ラバ、輓近ニ於ケル我國ノ出生率増加ハ死亡率ノ増加ニ原因スルニ非ザルカ。

毎五年ニ於ケル一年平均	生産	出生	死亡	生産超過
七―一一	三五・三	—	一八・四	六・九
一二―一六	三四・二	—	一八・三	六・九
一七―二一	三七・四	二九・一	二〇・九	六・三
二二―二六	—	二一・〇	二一・一	七・五

毎五年ニ於ケル一年平均	生産	出生	死亡	生産超過
二七―三一	—	三三・一	二〇・三	九・七
三二―三六	—	三三・五	二〇・五	二一・七
三七―四一	—	三四・七	二一・〇	二〇・五
四二―四四	—	三七・〇	二〇・八	二三・一

四十二年乃至四十四年ノ三年ヲ七年乃至十六年間ニ比スルニ死亡率ノ増加ハ約二・五ニ過ギズシテ、出生率ノ増加ハ一一・五ヲ超エタリ後者ハ前者ノ四・七倍ニ當ル。マタ十七年乃至二十一年ト最近三年トヲ比較スルニ、死亡率ニハ何等見ル可キ増加ナクシテ、出生率ノ増加ハ殆ンド一〇・〇ニ及ベリ。マタ、三十七年乃至四十一年ト最近三年トヲ比較スルニ死亡率ハ却リテ減少セルニ出生率ニハ一・三ノ増加ヲ見ル、三十七八年役ノ影響ヲ含ムトスルモ、此計數ハ決シテ、死生ノ平行ヲ示スモノニ非ズ。吾人ハコレラノ計數ヨリシテ、安ジテ次ノ如ク斷言スル事得。我國近來ノ出生率ノ増加ハ何等死亡率ノ増加ニ本ヅク所無シ。死亡率ノ著シキ増加ハ其物ガ既ニ殆ンド之ヲ認ムル能ハザルナリト。

カクテ、出生率ノ増加ノ原因ハ之ヲ有配偶者數ノ増加ニ覓ムル能ハズ、マタ死亡率ノ増加ニ覓ム

ル能ハズ、然ラバ進ミテ之ヲ體格ノ發達健康ノ增進ニ覓ム可キカ。而モ、死亡統計ハ一般死亡率ノ減少セズ、殊ニ靑年死亡率ノ稍高キヲ加ヘタルヲ敎ヘ徵兵檢査ノ成績ハ壯丁體格ノ連年不良トナル傾向ヲ明ニシ、疾病統計ハ國民ノ增殖ニ多大ナル影響ヲ及ボス花柳病及ビ結核病ノ蔓延ヲ表示セリ。顧リテ出生率ニ影響ヲ及ボス可キ他ノ因子ヲ考フルニ、知識ノ發達、生活程度ノ向上、虛榮心ノ增長等種々ナル事情ハ却リテ出生率ヲ減少セシムル作用ヲ有スルノミニシテ、何等其增加ヲ說明シ得可キ理由トナラザルナリ。